

庶務幹事この一年

東京大学物性研究所 木下豊彦

ようやく2年間の任期が終わりつつあるというのが実感ですが、その一方で非常にあわただしく時は過ぎたような気がいたします。太田会長をはじめ、幹事一同それぞれ忙しい中を縫っているいろいろな活動を行ってきました。

上坪委員長の元に設置された将来計画検討特別委員会は、この2年間で8回開催されました。学会の庶務幹事として、この委員会にはオブザーバーとして出席させていただきました。委員会の議事録は学会のホームページに掲載されておりますので、ごらんいただきたいと思います。昨年は、極紫外・軟X線の高輝度光源計画に関する中間報告がまとめられ、学会の主催する公開の場での議論も2回行われました。この間、平行して、東京大学、東北大学、KEK 3者の間に極紫外・軟X線放射光源検討会議が設置され、オールジャパンの計画として、施設計画の統合案が策定されたことは印象的な出来事でした。この光源計画のデザインレポートは、放射光学会の出版物として発行されています。また、委員会の中では、UVSOR、PF等既存施設の将来計画についても議論され、UVSORでは具体的な高度化の予算が認められ、PFでもエネルギー回収型ライナックを基盤とした検討が目に見えて進んでいる状況が実感できました。残念ながら、現在多くのユーザーが切望している極紫外・軟X線領域の施設は、統合案が策定されたにもかかわらず実現されていません。また、我が国が抱える放射光のインフラを如何に運用し、成果を上げていくかといったソフト面の検討も、今後欠かさないことでしょう。諸般の事情により、本委員会の最終報告は未だまとめられないようですが、少しでも良い方向へ、物事が進展していくよう、大いなる期待をもって今後の状況を見守りたいと思います。

佐藤前会長の執行部からの引き継ぎ事項で、年会への参加資格に関する案件が宿題として残っていました。前執行部の時代に、それまで明記されていなかった参加資格が、講演申し込み時点ではっきりと示されるようになったのですが、依然として放射光学会の主催する年会と、各共催団体の集まる合同シンポジウムの性格が非常にfuzzyなものであり、それぞれの団体の抱える歴史的な経緯からも、その線引きは非常に難しいものでした。2001年1月に開催された年会・合同シンポジウムの会場で、各共催団体の代表と学会幹事が集まって、その問題について議論しました。当初、学会会員に参加資格を限るという案も根強くあったのですが、合同シンポジウムのメリットはいろいろな

人たちが認識していること、学会会員でなくても、放射光科学の発展に寄与できるのであれば、それはすばらしいことではないのか、という意見が出て、結局、2002年合同シンポジウムの開催の運びとなりました。プログラムを見ていただく分かるように、これまでになく、幅広い共催団体の名前が並んでいます。

本会の会員数は1200名を越え、少しずつではありますが増加しています。また、年会・合同シンポジウムの参加者も、少しずつ増加しており、放射光の研究分野が広がりを見せていることを表しております。一方、他の学会に比べると学生会員が少ない(金銭的には相当優遇されているはずですが)、女性会員が少ないといった問題点も浮かび上がっています。この問題は、学会誌による情報提供や年会開催の他に、学会にはいるメリットは何か、そもそも学会の存在価値は何かという、非常に大きな問題と直結しています。これまでの活動で少しずつ改善はされてきているようですが、やはり、放射光科学に直接携わっている指導教官など、周りの人間の働きかけが一番かと思っています。会員の皆様のより積極的な働きかけに期待いたします。特に若手に活力のある学会にしていくことが何より大切ではないかと実感しています。不況の中、賛助会員の数が減少に転じていることも、気がかりです。

次期執行部の先生方をお願いしなくてはならない、積み残しの案件もいくつかでてきそうです。学会のホームページが貧弱であるという指摘を会員諸氏からいただいております。平谷渉外幹事、八木会計幹事のご努力で、いろいろな改善がなされ、特に、年会・合同シンポジウムの講演申し込みが、今後恒久的に、Webで行えるようになったことは画期的なことだと思います。これまでは、開催地の実行委員会の努力に負っていた面が強いのですが、今後は学会主体でこの方式が踏襲されていくものと思います。放射光関連の研究会の案内やセミナーのアナウンスなどもタイムリーにできるよう、有効に活用していただく手だてを考えると必要があると思います。執行部が変わるたびに、学会活動の継続性がなくなるのではないかなど、現在学会の抱えている制度上の問題点をそろそろ見直そうという動きがあります。我々の最後の活動になりますが、両宮委員長をお願いして、学会活動総合検討委員会(仮)を立ち上げていただきました。今後いくつかの建設的な案が出てくることが期待されます。

評議員会の定足数にはいつも冷や冷やさされました。

一度は定足数に満たないまま開催せざるを得ず、重要案件に関してはあとから承認していただくという事態も生じ、反省しております。最後になりましたが、太田会長をはじめ

幹事の先生方、事務局の方々には大変お世話になりました。2003年が、放射光科学にとって良いことがある年であることを願いつつ。

2002年度幹事報告

行事幹事この一年

高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所 河田 洋

昨年の第15回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムの再「同年会・合同シンポジウムの見直し委員会」が行われ、今後の年会・合同シンポジウムの運営方法に関して議論が行われました。その結果、1995年から共催団体としてご協力頂いておりました4施設・4利用者懇談会だけではなく、広く、大学に設置され稼働している施設、また建設中の施設、そして計画中の施設も含めて共催団体に加入して頂くことを呼びかける事を行いました。この背景には、この7年間で放射光施設の状況も発展を遂げ、例えば、広島大学、立命館大学、姫路工業大学の放射光施設が稼働をはじめ、実験成果が上がってきていること。また、佐賀県で代表されるような新しい放射光施設の建設がスタートしている事、またそれ以外にもいくつかの放射光施設の計画が議論されている事等々の状況の変化があります。その結果、第16回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムでは19の団体が共催団体としてご協力を頂く事となりました。今後とも、益々発展することを祈る限りです。また、物質・材料研究機構の桜井健次

氏、広島大学（渉外幹事）の平谷篤也氏には並々ならぬご尽力を頂いて、第15回、16回の年会・合同シンポジウムの講演申し込みでは、完全に Web から行う方式に一本化することが出来ました。私は何も実務を行っておりませんが、このような時期に行事幹事を行う事ができ、嬉しく思っております。

一方、「10年後の放射光施設・放射光科学のあるべき姿」を議論するシンポジウムを〔日本放射光学会将来計画検討特別委員会〕の議論の進捗状況と合わせて開催する予定でありましたが、道半ばのままに終わってしまいました。自分の力不足を反省すると同時に、後を高田行事幹事にお任せする次第です。

行事幹事として行き届かないところが多々ありまして、不愉快な思いをお掛けした場合も数多くあったと思っております。この場を借りましてお詫び申し上げますとともに、支えてくださいました皆様方、特に事務局の西野さん、須藤さんに深く感謝申し上げます。

2002年度幹事報告

編集幹事この一年

名古屋大学大学院工学研究科 曾田一雄

今年も編集委員や事務局の皆様の暖かい支援と意欲的な活躍のおかげで1年の活動を終えることができました。ありがとうございました。

年頭を振り返ってみますと、2002年度の編集方針は、1) 会員の皆さんに放射光に関する情報をできるだけタイムリーに届けるための年6号隔月定期発刊、2) 放射光を利用する異分野の状況が分かりやすく読みやすい「学際誌」としての機能の充実、3) 若手研究者に魅力ある情報の発信でした。

本年度から始める隔月発刊を機会に、「放射光ニュース」

欄を新設し、「お知らせ」欄の充実に努めました。「放射光ニュース」は、主として海外における放射光に関連した話題を200字程度で速報しようというものです。また、「お知らせ」では、各放射光施設の研究会等の開催に関する情報をタイムリーに提供したいと考えています。しかし、まだまだ未熟です。これらの記事は、偶数月末の掲載決定で翌奇数月末に掲載が可能です。会員の皆様からも積極的に情報を事務局宛、ご連絡、投稿して下さるようお願いいたします。

若手研究者に魅力ある異分野の情報提供としては、「放

射光研究の拡がり」と題した特集を組みました。ここでは、放射光にとっては新しく開拓された分野で最新の放射光技術が応用されている様子にスポットを当ててみました。宇宙科学、考古学、生態、環境調査、創薬、医療、科学捜査、産業利用など、基礎的分野から実用的分野まで放射光科学技術が発展的に応用されている様子を実感して頂けたでしょうか？

また、連載の「XAFS」シリーズが終了を控え、新たに「加速器光源」シリーズを企画しました。放射光を利用しているけれども専門分野が異なって光源装置のことはよく分からないという研究者や学生会員の方々が論文を執筆する際や実験する際に役立つことを願って加速器や光源の専門家に要点を易しく解説していただくというものです。このシリーズの掲載開始は、16巻1号からで、次期編集委員会へと引き継がれますが、2002年度編集委員会で

は、読者、特に放射光利用者の皆様のご要望をいただき、双方向の企画にしたいとも考えました。

一方、年6号発刊で学会誌が薄くなったなど感じておられるかもしれません。しかし、これは、これまで学会誌に使用していた紙が入手困難となって紙質を変更した結果、従来の約2/3の厚さになったためです。昨年と同程度の費用と総印刷ページ数となっています。ここでは、学会誌の充実のため、当初予定していた総ページ数と費用を2割ほど増やして頂きました。

2003年度より、編集幹事も他の幹事と同じ任期を持つことになりました。放射光学会誌の発行は、学会の重要な活動の一つです。新しい会長の下、次期幹事一丸となって取り組んでいかれることと思います。学会誌が会員相互の交流、情報提供の場として利用され、会員の皆様が益々活躍されることを願って報告を終わります。

2002年度幹事報告

渉外幹事この一年

広島大学大学院・理学研究科 平谷篤也

2年前に放射光科学コミュニティの要である放射光学会内部でのコミュニケーションおよび外部への情報発信の手段としてのホームページやメールシステムの整備を含めて渉外幹事を仰せつかり、昨年度は事務局をはじめ多くの方の協力を得て、メールシステムの整備とホームページでの学会発表申し込みが実現できました。

2002年度の渉外活動方針は、1)ホームページからの学会発表申し込みの継続を始めとするホームページの拡充整備、2)他団体が開催する行事への協賛や後援、3)放射光学会と他団体との共同主催による国際会議の開催、4)学術会議などでの放射光学会の地位向上、5)会員数の拡大を始めとする学会組織の充実、でした。

これらの中で、渉外幹事を依頼されたきっかけともいえる1)のホームページについては、学会開催組織やプログラム委員会、実行委員会などに依存して実現していたメールやホームページでの学会発表申し込みを学会として準備することができ、それに加えてプログラム原稿作成のかなりの部分を自動化することができました。そのため、毎回メンバーが替わる実行委員会やプログラム委員会への負担がかなり軽減されることとなります。ホームページのコンテンツの充実については、「我が国の放射光のグランドプ

ラン策定」のために設置された将来計画検討特別委員会での毎回の議論を昨年度に引き続きホームページに掲載するとともに、関連施設へのリンクの更新などを行ないました。一方、放射光学会をより親しみやすいものにするために取得した“jssrr.jp”ドメイン名へのホームページの移行と学会発表申し込みシステムの移行は宿題として残ってしまいました。2)については新たな団体を含む数多くの団体からの協賛依頼が舞い込み、放射光学会の知名度の高さと広がりを実感しました。3)については、学会として科研費が申請できる規模の国際学会がなく今年は実現できませんでした。4)については学術会議会員の推薦の年度にあたっていたため、推薦団体登録を行ないましたが、推薦手続きが延期されたため推薦にいたっていません。5)については、前年度からの引継ぎ事項であった年会・合同シンポジウムの見直しを行ない、計画を含むすべての放射光施設に共催団体となることを呼びかけるという形に落ち着きました。学会会員数は1200名を超えたものの、不況を反映した(?)賛助数の減少を食い止めることや学生会員を始めとする入退会方法の改善については新しい幹事会にお願いすることになります。

会計幹事この一年

高輝度光科学研究センター 八木直人

会計幹事を2年間務めさせていただきましたが、この2年間に放射光学会の会計に大きな変化はありません。先年度も今年度も会計は黒字（今年度のことはまだわかりませんが、そうなることを願っています）で、以前からの会計幹事の方のご努力で学会の繰越金は1000万円以上となっています。

この状況を見て、今年度後半からは少し方針を変えて、まず「なぜ黒字にして繰越金を増やす必要があるのか」を検討しました。学会の備蓄を増やす理由として第一に考えられるのは学会の法人化なのですが、これについては会計士の方のご意見を伺って、現状ではメリットが無いことがわかりました。

一方、会計が黒字であるということは集めた会費を十分に使っていないということも意味します。厳しく言えば学会員に対する還元が不足しているという見方も出来ます。会員への還元を増やす目的で、今年度は会誌の発行に関して年度の当初予算よりも若干多くの支出を認めることにし

ました。

1000万円以上という備蓄は、今後の学会運営にとって非常に有難いものであることは間違いありません。不景気で企業関係の収入が減っても多少は持ちこたえることが出来ますし、会計的に大胆な学会運営が可能となります。赤字になったら次の年に黒字にして埋め合わせればいいのです。今後の会計幹事の主な任務は、この備蓄を極力減らさずに、賛助会員を含む会員全員に対して、会費に見合っただけの見返りのある活動をするようになると思います。

考えてみると、学会というのは入っていて何らかのメリットが無ければ誰も会員にはならないわけで、科研費等の研究費に直接結びつかない放射光学会が研究者にとってあまり魅力的でないのは避けられません。会員が放射光学会に入っていてよかったと感じてくれるにはどうしたらよいかを、会計の面からも真剣に考えるべき時だろうと思います。